

た、また脳波異常とそのときの臨床症状および炭酸リチウムの血中濃度との関連についても若干の考察を加えた。

19. Phenobarbital 単独投与の小児における血中濃度の年齢的差異

(小児科) ○北原 久枝・後藤 友子・
杉江 陽子・福山 幸夫

Phenobarbital (以後 PB と略) は、kindling preparation を用いた実験で、その抗けいれん効果と共にてんかん予防効果もあることが確かめられており、臨床でもてんかんの治療や熱性けいれんの予防等に広く使われてきた。一方その副作用としての不活発、興奮性、多動等が、特に発達途上の小児の知能発達に及ぼす影響は無視できないといわれてきている。また成人でも PB 血中濃度が 20~30 μ g/ml で perception motor performance に影響を与えるとの報告である。したがって PB の投与量と血中濃度の関係のある程度予想をたてることは重要であるが、年齢別にその関係について検討した報告は少なく、Svensmark & Buchthal らは体重別に 10kg から 43kg の小児について検討し、PB 血中濃度/投与量比 (以後 S/D 比と略) は体重とはほぼ直線関係にあるとし、大人は S/D 比で 10.0 であると報告している。今回われわれは 2 ヶ月から 16 歳までの PB 長期単独投与小児 117 症例を年齢別に投与量と血中濃度および S/D 比について検討し以下の結果を得た。

乳児から 4 歳未満では投与量と血中濃度はかなりよい相関を示し S/D 比も年齢と共に大となっていくが、4~5 歳および 7~9 歳の S/D 比の増加は小さく、投与量と血中濃度の関係の変動も大きい。11 歳以後になると変動も少なく、S/D 比も年齢と共に成人の 10 に近づいていくようである。4 歳から 9 歳にかけての S/D 比の横ばい状態の理由としては、小児の発達という側面から考えてみる必要があると思われるが、コンプライアンスの問題も含めてさらに症例を重ねながら検討していく予定である。

20. CTscan において脳室拡大像を示した Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome の 1 例

(神経内科) ○樋上 裕子・岡山 健次・
竹宮 敏子・丸山 勝一

Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome には肥満・網膜色素変性症・知能低下・性器発育不全・多指(趾)症・家族内発症の 6 主徴が知られている。その病因には常染色体劣性遺伝子の障害が考えられ、わが国でも既に

200 例以上の報告があり、糖代謝・甲状腺機能・副腎機能の異常に関する報告が注目を浴びている。

患者は 26 歳の女性で、肥満 (+42%)・網膜色素変性症・多指趾症・家族内発症の 4 徴候を有し、他に兔唇・小舌症・歯列不整等の奇形を伴っており、頭蓋 X 線写真において扁平頭底症があつた。今回われわれは明らかな中枢神経症状や知能障害を認めなかつたにもかかわらず、CTscan において脳室拡大像のみられた Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome の 1 例を経験したので若干の考察を試み、報告した。

21. 動脈瘤における RI angiography の意義

(放射線科)

○榊原 幸子・喜多みどり・和貝 恵子・
牧 正子・日下部きよ子・山崎純四郎・
重田 帝子

目的：動脈瘤の疑われる症例に対し、RI angiography をおこない、続いて種々の方向から blood pool scan をおこない、大動脈造影による所見と対比し、検討を加えた。

方法：動脈瘤の疑われた症例 10 例に 99m Tc-HSA (human serum albumin) を静注後、1.5~2 秒間隔で、シンチカメラ (PHO/GAMMAWA) により連続撮影し、sequential image を得、次いで static image を得た。

結語：I) RI angiography により得られた所見は、大動脈造影所見に良く相関し、大動脈瘤の範囲の推定に有効であつた。II) 大動脈造影法と比較し RI angiography は、①手技が簡単である (RI 静注のみ)、②患者の負担が軽い、③反復検査が可能。(被曝量が少ない)、④ dynamic image に続いて多方向の static image を得ることが可能。(99m Tc-HSA を使用)。

以上より、大動脈造影法の適応を決定する検査として有用であると思われた。

22. 副腎の CT スキャン

(放射線科)

○広沢 邦浩・成松 明子・松永和歌子・
鈴木 恵子・飯田 恵子・平松 慶博

副腎疾患の X 線診断は血管造影の普及と副腎シンチグラフィの進歩により、近年、非常に診断能が向上してきた。皮質腺腫では直径 1cm 以下のものまで診断可能となつて来ている。

1974 年以降、CT スキャンが全身に應用されるようになり、後腹膜腔臓器の診断に非常に有効であることが数多く報告されている。後腹膜疾患の X 線診断に大きな

革新がもたらされたと言っても良い。副腎は豊富な腎周脂肪層に包まれており、CTによる描出も容易である。したがって副腎疾患、特に腫瘍の診断法としての価値も充分にあるものと思われる。

1977年6月以降、当科において経験した副腎の各種腫瘍について、そのCT像を検討し、他検査との比較から、副腎疾患のX線診断におけるCTスキャンの臨床的価値について述べた。

23. HDL-コレステロールの正常値の検討および冠状動脈疾患群との対比

(成人医学センター)

○赤松 順子・山下婦美子・松野 堅・堀江 俊伸・山田 辰一・渋谷 実

(東京クリニカルラボトリー)

藤井 幹夫・藤田 政之

近年、HDL-コレステロールと冠状動脈疾患との関連について、注目をあびている。われわれは、成人医学センター受診者中の正常血圧、ダブルマスター試験陰性、肥満率10%以下、血清総コレステロール240mg/dl以下、血清中性脂肪170mg/dl以下、糖代謝異常、肝胆道疾患等の認められない者、およびその他の血液生化学的検査所見に異常のない40~70歳の健常者について検討した。これらは、大都市生活者であり、これらと農村、漁村生活者との比較も行なつた。なお、以上の正常者群と心筋梗塞、および狭心症患者とのHDL-コレステロール値の対比を行なつた。検査方法は、ヘパリンおよび塩化マンガンを用いた沈降法によりHDLの分離を行ない、酵素法にてHDL-コレステロールの測定を行なつた。結果：①男性は女性より低値を示した。②正常者群と冠状動脈疾患との対比において、男性では、有意の差は認められなかったが、女性では、冠動脈疾患群でHDL-コレステロールは、低値を示した。また、ヘパリン、塩化マンガン法についても種々の検討を加えた。さらに他のリポタンパクの分離方法としての超遠心法、電気泳動法等との対比、および分離後のコレステロールの測定についても、ガスクロマトグラフィー法、比色法との比較検討を行なつた。

24. シャム猫から感染した *Microsporum canis* による小水痘性斑状白癬の1例

(第2病院 皮膚科)

○塩谷千賀子・羽田野留美子・酒井弥寿子・青木 良枝

患者は東京都足立区在住の15歳の女子、初診昭和53年

6月15日、初診2週間前から右前胸上部、右上膊、右大腿内側に直径約1~1.5cmの輪状の病巣を見る。痒痒中等度。数年前からシャム猫を飼っており、猫の耳の後部にびまん性の脱毛を認める。患者の病巣と猫の病毛の鏡検で菌要素を証明。スライドカルチャーで定型的な大分生子を認めた。局所はナフチオメート製剤軟膏を使用した。

25. 最近経験した大腿骨大転子部結核の2例

(第2病院 整形外科)

○松木 孝行・大野 博子・上田 禮子・石上 宮子・須永 明・菅原 幸子

抗結核化学療法および予防医学等の普及により、今日では骨関節結核も、まれな疾患となつた。さらに従来、骨関節結核統計的報告の中で特に大腿骨大転子部結核のしめる割合は少ない。最近われわれは大転子部結核2例を経験したので報告する。

症例Ⅰ、62歳男性。左大腿部痛を主訴として来院した。左大腿上部に波動を認める腫脹と圧痛が見られ、レントゲン像において、大転子部の骨破壊像を認めた。腫脹部の穿刺により、血性および膿性の液が見られ、結核菌培養陽性であつた。膿瘍部造影で大転子部と連絡を認め、搔爬術を施行した。病理組織学的診断は結核であつた。三者併用療法を行ない、術後約2カ月で退院となつた。

症例Ⅱ、43歳男性。左大腿部痛を主訴として来院。大転子部に圧通があり、レントゲン像で同部の骨破壊像が見られた。搔爬術が施行され、病理学的に結核と診断。血沈の亢進、局所症状も消失し、全身的にも良好であつたので、抗結核化学療法剤は用いず20日後に退院。退院後約7カ月で、大転子部の疼痛および波動を認める腫脹が再発した。レントゲン像でも同部の骨破壊が再び出現したために三者併用療法を開始すると共に再び搔爬術を施行した。抗結核剤は約1年間使用し、術後3年目の現在再発はない。

大腿骨大転子部結核は手術手技の容易性、および治療時における関節の運動の運動性が良好な点において、脊椎あるいは関節の結核と比較し、その経過は良好であり、われわれの症例においても現在再発はなく、股関節の機能も良好で職場に復帰している。

26. 家兎 VX₂ 腫瘍に対する Levamisole の能動免疫療法の効果

(第2病院 外科)

○松村 功人・山崎 靖夫・蒲谷 堯・